

戦前期中等学校国語科教科書に関する研究

—教科書一覧表の作成と目次データの取り扱いを中心に—

小笠原 拓*

A study on Pre WW II Japanese Language Textbooks of Secondary School
Focusing on how to make a textbook list and how to handle table of contents data

OGASAWARA Taku*

キーワード：中等学校，国語教科書，古典教材，目次，データベース

Key Words: Secondary school, Japanese language textbooks, Classic works, Contents, Database,

I. はじめに

(1) 研究の目的

本研究は、戦前期中等学校国語科教科書に関する目次データベースの作成を目指し、作成のために必要な基礎的作業の重要性を明らかにしようとするものである。戦前期中等学校国語科教科書の研究は、国定教科書制度のもとで進められてきた小学校と比較して、未だその全体像が十分に捉えられているとはいえず、研究的な空白部分も少なくない。本稿では、その空白部分を埋めるために必要な基礎的作業の手順を具体的に示すとともに、戦前期中等学校国語科教科書に関する研究における目次データの重要性について論じたい。

後で詳しく述べるように、本研究の最終的な目的である戦前期中等学校国語教科書目次データベースの作成は、作業量的に到底一人でできるものではない。完成までには多くの方々の協力が前提となる。本稿では、このようなデータベース作成の意義や課題について具体的に論じるとともに、実際の作業量やそのために必要な協体制の構想についても触れ、その可能性について検討したいと考えている。

(2) 先行研究

戦前期中等学校国語科教科書については、1980年

代以降、その全体像を把握し検討しようとする研究が本格的に進められるようになったと言える。井上（1981）や教科書研究センター（1984）等によって代表的な中等教科書を手掛かりとして、その内容の変遷等について通史的な流れが概観されるようになった。しかし後に述べるように、戦前の中等学校教科書はその大半の時期において検定制度が導入されており、かつ対象によって学校種が細かく分かれていたため、数多くの教科書が出版されており、その全体像を正確に把握することは非常に困難であった。

この状況に大きな風穴を開けたのが、田坂（1984）である。本書は、戦前までの中等学校講読用の国語教科書のうち約 2000 冊を調査対象とし、その目次に基づいて作成された採録教材の内容索引である。この研究によって、この時期の中等学校教科書に採録された教材について、その変遷等を大局的に比較することが可能となった。これ以降、多くの研究が採録状況を調査する際に、基礎的な資料として本書が用いられてきた。特に古典教材の採録状況に関する研究については、本書に負うところが大きい。一方、田坂とは異なるアプローチで近代文学作品に絞った上で、国立教育政策研究所附属教育図書館に所蔵された全ての教科書を対象に研究を行ったものとして、橋

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

本(2002)を挙げるができる。とはいえ、量的な問題から多くの研究は時代や作品および教科書を限定して行うものがほとんどである。例えば、近年の中等学校教科書研究における労作の一つに数えられる眞有(2005)も、これまで研究的に手薄であった高等女学校の教科書のみを対象としたものであり、直接分析の対象とした教科書もかなり限られたものであった。本研究は、このような研究状況を踏まえ、より網羅的な研究を可能にする研究環境の構築を目論むものである。

(3) これまでの研究経緯

筆者は、2018年10月に実施された第135回全国大学国語教育学会(東京ウォーターフロント大会)において「戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究」と題した発表を行い、主に吉田弥平『中学国文教科書』(光風館)を元に現在の中等学校国語科教科書に関する研究の課題について既に報告している。この発表題目からも分かるように、もともとの研究の趣旨は、これまで作品ごとに行われてきた戦前期の中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究について、より横断的な研究ができないだろうかという点にあった。しかし研究を進めていく上で、後に述べるような、これまでの研究に関する資料上の大きな問題点に直面し、その内容について具体的に示した。その結果、当日、会場の司会を担当されていた日本体育大学の府川源一郎氏より、北海道教育大学の菊野雅之氏らが現在同様の研究を進めつつあるという指摘を受け、その場で共同研究を申し入れ、快諾された。

そこで2019年6月におこなわれた第136回全国大学国語教育学会(茨城大会)において菊野氏をコーディネーターとしてラウンドテーブルを開催し、信州大学の八木雄一郎氏、尾道市立大学の信木伸一氏とともに発表者を務め、「戦前期中等学校国語科教科書研究の現状と課題——「高等女学校国語教科書一覧表」の作成を手掛かりとして——」と題した報告を行った。現在、府川氏・菊野氏・信木氏・八木氏に加え、浜松学院大学の勘米良祐太氏等とで共同研究を進め、後に示す「中等学校教科書一覧」の作成を進めている。具体的には、「中等学校国語教科書一覧表」を八木氏が作成し、

小笠原が「高等女学校国語教科書一覧表」と「師範学校・実業校国語教科書一覧表」の作成を担当した。さらにすべての学校種における「文法書一覧表」を勘米良氏が作成し、それぞれをメンバー間で共有するなどして研究を進めるほか、その後の学会などを通じてさらにメンバーを募るなどして、研究体制の構築に努めているところである。

本稿ではまず、中等学校国語科教科書一覧表がなぜ必要なのか、これまでの研究上の課題を踏まえて論じる。次に、筆者が作成した「高等女学校教科書一覧表」と「師範学校教科書一覧表」に基づき、その作成過程と課題を具体的に示すとともに、その研究上の必要性や有効性を具体的に明らかにする。さらに作成した教科書一覧表を用いた教科書内容の縦断的な検討を行うために必要な、目次データベースの構築に向けて、その可能性と課題を具体的に論じることとする。

II. なぜ「中等学校国語教科書一覧表」が必要なのか

(1) 戦前期中等学校国語科教科書研究が抱える課題

戦前期の中等学校国語教科書について、その全体像を明らかにしようとする上で最初に考慮しなければならないのは、教科書の発行点数の多さである。1886(明治19)年の「中学校令」第8条で「教科書ハ文部大臣ノ検定シタルモノニ限ルヘシ」と定められて以降、太平洋戦争時代にいたるまで、中等学校の教科書は検定制度のものに発行されることとなった¹。結果として、数多くの教科書が発行され、検定を受けて学習者に供給されることとなった。例えば、最も多くの戦前期の教科書を所蔵する図書館の一つである東京書籍株式会社附設教科書図書館・東書文庫(以下、東書文庫)では、戦前期の中学校用国語科教科書3,066冊、高等女学校用教科書が1,678冊、師範学校用教科書が404冊、それぞれ所蔵されていることがわかる。また、東書文庫と並んで戦前期の教科書所蔵する国立教育政策研究所附属教育図書館(以下、教育図書館)には、検定期の教科書だけで中学校用国語教科書が2,230冊、高等女学校用教科書が2,621冊、師範学校用教科書が324冊、それぞれ所蔵されている²。これら全ての教

科書を網羅的に検証するには、多大な労力が必要となることは言うまでもない。

さらに検定期以降の教科書について問題となるのは、対象となる教科書が検定を通過したかどうか、その有無を確認しなければならないという点である。先に挙げた東書文庫や教育図書館およびその他の図書館に所蔵されている教科書は、検定申請するために提出された教科書（見本本）、検定に合格した教科書（検定合格本）、検定後に実際に各学校へ供給された教科書（供給本）、検定により通過できなかった本などが混在している³。とくに東書文庫や教育図書館のそれは、多くが見本本や検定合格本であり、「文部省検定済」の印が付された供給本と違い、一目でそれが検定を通過したものか否かを確認することができない。この点について現在は、1985（昭和60）年から1986（昭和61）年に復刻された『検定済教科用図書表』（復刻版、解題・中村紀久二、芳文館）によって検定の有無を確認することが可能となっているが、その手続きはかなり煩瑣なものである。いずれにせよ、ここで確認しておきたいのは、単に量的な多さによって網羅的な研究が困難であるというだけでなく、残されたすべての教科書の内、検定を通過したものとそうでないものを選び分ける点でも難しさがあるということである。

（2）田坂（1984）の問題点

無論、網羅的な研究がこれまで全く行われてこなかったという訳ではない。なかでも国語科の領域において重要な業績とされているのが、Iでも触れた田坂（1984）である。本書は、戦前までの中等学校講読用の教科書について「欠巻のあるものは省き、また、できるだけ初版本によること」⁴という方針に基づき、それらの目次に掲げられた作品ごとに教科書での採録状況をデータ化した。本書を用いることによって、出典が掲載されていないものも含め、実際に教科書に掲載されている作品すべてについて、どの作品がどの教科書の何課に掲載されているのかを、具体的に調べることができる。現在でも、特定の作品の採録状況を調査する際、そのほとんどの場合で参照される資料であり、極めて重要な研究である。しかし戦前期における中等学校国語科教科書の実際の出版状況を考慮したとき、実は本書にはいくつかの重要な問題が存在する。

ここで改めて、この著作の問題点について確認しておきたい。先に触れた『検定済教科用図書表』の解題を記した中村紀久二は、本書の問題点について次のように述べている⁵。

田坂文徳編『旧制中等教育国語科教科書内容索引』

（教科書研究センター）は、明治・大正・昭和戦前期の旧制中学校、高等女学校の国語読本220種類、約2,000冊を対象とした教科書所収題材の出典別、作・著・編者別索引であり、本書は他に類書がなく中等学校国語科教材史研究や図書館等におけるレファレンス・サービスのための重要な基礎資料となっている。しかし、その教科書素材として本書「凡例」に、「できるだけ初版本によること」に努めたとあるように、編者は教科書についても初版本が第一義的資料と信じており、分析対象の教科書として敢えて初版本（検定申請本）を選んでいる。そのため教科書検定審査により教材の差換えが指示され、追願による検定合格本や供給本で削除された教材を収録しており、逆に検定合格本、供給本で差換えた教材が脱落している。

上記の引用文については、少し説明が必要であろう。先にも述べたように戦前期の中等学校教科書は、小学校のような国定教科書制度ではなく、各教科書会社が申請を行い、それに対して文部省が検定を行った上で使用の許可および不許可を決定するという検定制度が取られていた。従って実際に当時の学習者がどのような教科書を用いて学んでいたかを研究しようとするれば、当然「検定合格本」（文部省の検定を受け合格と見なされた教科書）または「供給本」（実際に学校等で使用された教科書）を対象とする必要があり、検定の有無を判断することが求められる。しかし田坂は一般の書籍と同様に教科書においても「初版本」を第一義的な資料と捉え、それを本書の調査対象として集めてデータ化を行った。しかし上記の指摘からも分かるように、「初版本」はそのほとんどの場合、「検定許可本」ではなく「検定申請本」に該当し、実際に教科書として教室で用いられたものとは違っている可能性が極めて高いのである⁶。

このことは、単に「初版本」に限った問題ではない。中等学校の国語科教科書においては、書名を変更する

ことなく長く版を重ねた教科書がいくつも存在していた。長期にわたって版を重ねた教科書については、当然ながら法令等の影響もあって何度も改訂が行われ、その内容についても大きな変更がなされている⁷。それにもかかわらず、本書では、初版本だけが調査の対象となっており、出版後に変更を重ねて改訂された多くの教科書が無視されてしまっている。本来、教科書内容の変遷を調査するための索引であるにもかかわらず、実際にはその変遷を見るために必要なデータが収録されていないということになる。なお、この点については、後に改めて具体的に詳述する。

上記のような問題に加えて、もう一つ問題を指摘しておきたい。本書は、師範学校および実業学校向けの教科書を研究の対象とはしていない。確かに師範学校の教科書は、その内容については中学校のものと殆ど酷似している場合もあり、研究対象としての価値はやや低いという見方には、一定の理解が可能である。しかし中等学校国語科教科書の全体像というからには、師範学校や実業学校を全く視界から外してしまっているというのは、やはり問題と言わざるを得ない。師範学校や実業学校は時代による学校制度が変遷の影響を受けて、中学校や高等学校と比較しても、教科書の内容や構成について変化を余儀なくされる局面が少なくなかったと考えられる。だとすれば、その変化を分析することにより、それぞれの学校種において重要とされた内容が何であったかを、教材採録状況から具体的に分析することもできるはずである。しかし本書だけでなく、先に挙げた井上(1981)においても、師範学校や実業学校の国語科教科書については、無視されている現状がある。このような状況を踏まえたとき、まず戦前期の中等学校において実際に使用されていた検定教科書がどれであるのかを具体的に把握する必要があることがわかる。そこで、戦前期に検定された全ての国語教科書について、改訂本も含めたすべてのエディションを対象に一覧表を作成することにした。このような試みは、他領域においてはいくつか確認されているものの⁸、国語教科書については管見の限り前例がないものである。以下では、その手続きと課題について具体的に示すこととする。

Ⅲ. 国語教科書一覧表の作成過程と課題

(1) 一覧表の作成手順

今回作成した一覧表(巻末の資料 1,2 を参照)は、先にも触れた『検定済教科用図書表』(以下『図書表』と表記)、に記載された内容に基づき、高等女学校(一部高等女子師範学校)および師範学校・実業学校向けに発行された国語教科書について、その書誌情報及び検定状況に関する情報のリスト化を行ったものである。なお戦前期中学校、及び高等女学校国語科教科書については、眞有(2005)の巻末にある年表の中で同様の情報が年代ごとに掲載されているが、『図書表』内の項目の記載内容を確認するという目的もあり、今回はデータの抽出にあたって敢えて『図書表』に直接当たり、改めて一覧表の作成を改めて行うことにした。

具体的に一覧表においてデータの対象とした情報は、「学校種」「書名」「冊数」「発行年月日」「版数」「検定年月日」「著作者」「発行者」である。その他『図書表』において「修正」「修正ニ依リ更ニ検定」などの補足情報が記載されている場合、その情報を「備考①」として書き出した。また「備考②」は、昭和戦前期の検定において、教科書の全巻ではなく一部を対象とした検定が行われていたことが記載されており、その内容について示したものである。枠内にいくつか見られる灰色の項目は、誤記や印刷不鮮明など、データの信頼性に疑問があったり、正しい情報が確認できなかったりしたものである。筆者自身の確認ミスの可能性は言うまでもないが、『図書表』自体、厳密に言えば官報等の情報をまとめた二次資料であり、本来であれば、少なくとも疑いのある情報については、教科書原本や官報に当たって真偽を確かめる必要があるが、今回は時間の関係もありそこまでの作業は行うことができていない。つまり今回提出した一覧表は、あくまで「暫定版」であることを強調しておきたい。

(2) 作成過程における課題

一覧表の作成にあたってまず問題になったのは、どこまでを「教科書」と見做すかどうかということである。『図書表』は文法書や作文教科書さらには教師用の指導書のようなものまで、「検定済教科用図書」として雑多に掲載されており、タイトルをみただけでは、どの本が現在のような意味での「教科書」を表している

のか、はっきりしない場合が少なくないからである。また戦前の高等女学校の制度とも関連するのだが、当時の教科書は五年制、四年制、三年制など、学校の状況に応じて対応が可能のように、同じ教科書会社であっても様々なバージョンで出版されることが頻繁に行われていた。それらをどのように一覧表の中に入れるのかについても、色々と考慮する必要が生じてきた。今回は、基本的に「様々な時代の作品が雑多に掲載され教科指導の根幹をなすと考えられるもの」は全て「教科書」としてカウントすることにした。よって「補習科用」「上級用」「三年制用」といったものも原則としてリストに含める方針とした。

また『図書表』のデータが不統一であることも一覧表作成において、大きな問題となった。一例として、「訂正」「訂正発行」「訂正再版」「訂正再版発行」「修正再版発行」「再訂発行」などの表記の違いを挙げることができる。これらの表記の違いがどれだけの意味内容の違いをもっているのか（あるいは違いはないのか）については、現時点で確認することはできていない。但し今回は原則として『図書表』の表記に従い、そのまま掲載することとした。このような表記の不統一が問題になるのは、データベース化した際の検索結果に影響を与える可能性があるからである。今回の試みは、データベース化によって様々な書誌情報が検索可能となり、その数値的な状況が検索結果として明らかになることを期待して行われているが、表記の不統一は、その妨げになる可能性があり、今後検討を行う必要がある。このことは、例えば書名や人名の漢字表記や出版社名の変更などをどのように扱うかという点にも及ぶことになる。今回、漢字表記については、人名を除いては原則として新字体を用いることとした。

最後に最大の課題として、それぞれの教科書に関する所蔵確認の問題がある。『図書表』に書かれた情報はあくまで「出版され、検定を受け、それを通過した」ことを示しているに過ぎない。実際、過去に行った調査⁹でも、多くの検定済教科書が、日本で最も戦前期の教科書を所蔵していると考えられている東書文庫および教育政策研究所附属図書館のいずれにも存在していないことが確認された。今後、後に述べるような目次データの挿入を行うためにも、現在、どの教科

書がどこに所蔵されているのか（または所蔵されていないか）について、出来る限り調査を行う必要がある。

IV. 教科書リストの有効性

(1) 教科書リストから見えてくる事実

Ⅲで述べたような手続きに従って『図書表』から項目を拾い上げていった結果、高等女学校で用いられた国語教科書については、270種類の教科書のデータを抽出することができた。先にも述べたように、この270種類という数字は本来の教科書出版点数と比較した際、(筆者の見落としを除けば)やや多めに見積もっている可能性がある。それぞれの教科書は2-15冊程度(多くの教科書は8巻もしくは10巻)の巻数で構成されており、それらを合計すると2187冊という数字が出た。正確な数字は今後の検討課題とするが、おおよそ2000冊程度の出版点数があったということがわかる。

一方、師範学校・実業学校の国語教科書については、あわせて159種類の教科書が出版されていたことを確認できた。師範学校の教科書は5-6冊で一組となっていることが多く、実業学校は8-10冊で一組となっているのが一般的である。但し、二部用、予科用など2-4冊程度で一組となっている教科書も少なくないことから、おおよそ1000冊程度の教科書が検定教科書として出版されていたということがわかる。但し、先にも述べたように、この数値は何を「教科書」と見るかでやや幅が出るものである。また「図書表」において「実業学校」という検定の枠組みが登場するのは1932(昭和7)年4月以降のことであり、それ以前に実業学校の教科書が登場しないのは、そのためである。一方、「実業学校」という枠組みが登場して以降、「師範学校」の枠組みで検定を受けた教科書の冊数が大きく減っている印象を受けるが、その理由については現時点ではわかっていない。

これまでの調査から、中学校でも約2000冊程度の教科書が出版されていたことが確認されている¹⁰。このことから、中等学校全体では、中学校、師範学校、実業学校などの教科書を合計した場合、おおよそ5000冊程度の出版点数があったのではないかと考えられる。但しこれらの教科書が現在全て閲覧可能な状態に

あるという訳ではない。少なくとも東書文庫および国立教育政策研究所附属図書館において、所蔵を確認することのできない教科書が多数存在するということは現時点でも明らかになっている。ゆえに約 5000 冊というのは、データベースの対象となりうる教科書の上限度ということになる。実際には、先の二つの図書館の調査のみでは、かなり少ない数値となることが予想される。とはいえ、全体の規模が分かったこと、およびデータベースの対象となるべき正しいエディションの教科書がどれであるかということが明確になったことは、この一覧表作成がもたらした大きな成果と言える。

(2) 教科書リストを用いた出版状況の分析

また、この一覧表は抽出した項目をデータベース化していることにより、検索によって様々な情報の絞り込みが可能になる。これにより、各教科書の出版状況やその変遷などを把握するのが極めて容易になった。「書名」「著作者」「出版社」などについて、例えば特定の「著者」や「出版社」を選択すれば、関連する教科書を抽出した表を即座に作成することが可能である。当時の教科書の出版状況を具体的に把握する上で、極めて有効なツールとなっているのである。以下ではその実例を、具体的に示してみたい。例えば「金港堂書籍株式会社」が出版した教科書は、以下の表 1 の通りである。

表 1 金港堂書籍株式会社発行による高等女学校国語科教科書一覧

書名	巻冊	発行年月日	版数	検定年月日	著作者
女子日本読本	全八冊	明治29年3月31日	訂正再版	明治29年4月16日	新保馨次
女子日本読本	全八冊	明治30年6月8日	訂正三版	明治30年6月14日	新保馨次
女子国語読本	全十冊	明治35年3月26日	訂正再版	明治35年3月29日	吉田彌平 岡田正美 篠田利英 小島政吉
女子国語読本	全十冊	明治37年1月17日	訂正四版	明治37年2月9日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
再訂女子国語読本	全八冊	明治40年4月8日	訂正六版	明治40年4月12日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
三訂女子国語読本	全十冊	大正2年1月20日	訂正十版発行	大正2年1月27日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
修訂女子国語読本実科用	全八冊	大正4年1月13日	修正四版発行	大正4年1月19日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
三訂女子国語読本	全十冊	大正4年1月22日	訂正十二版発行	大正4年1月22日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
新撰女子国語読本	全八冊	大正8年1月20日	訂正再版	大正8年1月30日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
四訂女子国語読本	全十冊	大正8年1月15日	訂正十四版	大正8年2月20日	吉田彌平 篠田利英 小島政吉 岡田正美
新訂女子国語読本実科用	全八冊	大正9年2月12日	訂正六版	大正9年2月18日	吉田彌平 篠田利英 小島政吉 岡田正美
女子現代文読本	全五冊	大正10年6月5日	訂正再版	大正10年6月11日	奈良女子高等師範学校付属高等女学校国語研究会
五訂女子国語読本	全十冊	大正11年1月17日	訂正十六版	大正11年1月28日	吉田彌平 篠田利英 小島政吉 岡田正美
五訂女子国語読本	全十冊	大正12年12月31日	訂正十七版	大正13年1月30日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
六訂女子国語読本	全十冊	大正14年2月12日	訂正十九版	大正14年2月18日	吉田彌平 小島政吉 篠田利英 岡田正美
女子国文読本	全八冊	大正15年2月24日	訂正	大正15年3月2日	吉田彌平 篠田利英 小島政吉
新定女子国文	全十冊	昭和3年1月24日	訂正再版	昭和3年2月2日	吉田彌平
女子現代文新鈔	全五冊	昭和5年1月24日	訂正再版	昭和5年1月29日	吉田彌平
新訂女子国文 改訂版	全十冊	昭和8年1月12日	訂正四版	昭和8年1月18日	吉田彌平
新定女子国文	全十冊	昭和12年11月23日	訂正再版	昭和12年12月16日	吉田彌平

これを見ると、金港堂は新保馨次『女子日本読本』、吉田彌平他『女子国語読本』、吉田彌平『女子国文読本』という三種類の教科書を主に出版していたことが分かる。さらにそれぞれの教科書における検定期間がほぼ重複していないことから、それぞれの教科書が前の教科書を引き継ぐような形で出版されていたこと見

ることができる。また検定の間隔は一定とは言い難いものの、ほぼ1～3年程度の間で行われていたことも見て取れる。しかし、全ての教科書会社が同様の方針を採っていた訳ではない。金港堂と同様に多くの教科書を出版していた「合資会社富山房(富山房)」の場合、次の表2のようになる。

表2 合資会社富山房発行による高等女学校国語科教科書一覧

書名	巻冊	発行年月日	版数	検定年月日	著作者
新定女子読本	全八冊	大正2年1月13日	訂正再版発行	大正2年1月13日	芳賀矢一
改訂新定女子読本	全八冊	大正4年1月16日	改訂再版発行	大正4年1月19日	芳賀矢一
女子補習国文	全二冊	大正8年2月8日	訂正再版	大正8年2月20日	芳賀矢一
改訂女子国文	全八冊	大正10年12月26日	改訂再版	大正11年1月10日	芳賀矢一
改訂女子国文	全十冊	大正10年12月26日	改訂再版	大正11年1月30日	芳賀矢一
改訂女子補習国文	全二冊	大正11年2月5日	訂正四版	大正11年2月10日	芳賀矢一
改訂女子国文	全十冊	大正12年10月13日	改訂三版	大正12年11月14日	芳賀矢一
女子補習国文	全二冊	大正13年1月13日	訂正再版	大正13年1月18日	芳賀矢一
国文	全十五冊	大正15年2月25日	訂正再版	大正15年3月1日	富山房編集部
改訂女子新国文	全八冊	昭和元年12月27日	訂正四版	昭和2年1月12日	芳賀矢一
改訂女子新国文	全十冊	昭和元年12月27日	訂正四版	昭和2年1月12日	芳賀矢一
新文学	全五冊	昭和3年12月22日	訂正再版	昭和4年1月9日	富山房編集部
日本女子読本	全十冊	昭和5年2月14日	訂正再版	昭和5年2月18日	高木武
日本女子読本	全八冊	昭和5年2月14日	訂正再版	昭和5年2月18日	高木武
改訂女子国文	全八冊	昭和5年4月1日	訂正再版	昭和5年2月5日	芳賀矢一 橋本進吉
改訂女子国文	全十冊	昭和5年4月1日	訂正再版	昭和5年2月5日	芳賀矢一 橋本進吉
改訂国文 女学校用	全十五冊	昭和6年1月16日	訂正四版	昭和6年1月29日	富山房編集部
女子新国文	全十冊	昭和7年10月15日	訂正再版	昭和7年10月31日	芳賀矢一 橋本進吉
女子新国文	全八冊	昭和7年10月27日	訂正再版	昭和8年2月20日	芳賀矢一 橋本進吉
国文 女学校用	全八冊	昭和8年7月4日	訂正再版	昭和8年7月11日	富山房編集部
国文 女学校用	全十冊	昭和8年7月4日	訂正再版	昭和8年7月11日	富山房編集部
日本女子読本 改訂第一版	全八冊	昭和8年8月24日	訂正再版	昭和8年9月2日	高木武
日本女子読本 改訂第一版	全十冊	昭和8年8月24日	訂正再版	昭和8年9月2日	高木武
女子新国文 新訂版	全八冊	昭和10年11月8日	訂正四版	昭和10年11月12日	芳賀矢一 編 橋本進吉補
女子新国文 新訂版	全十冊	昭和10年11月8日	訂正四版	昭和10年11月12日	芳賀矢一 編 橋本進吉補
日本女子読本 改訂第二版	全十冊	昭和11年12月3日	改訂第二版訂正再版	昭和11年12月22日	高木武
日本女子読本 改訂第二版	全八冊	昭和11年12月3日	改訂第二版訂正再版	昭和11年12月22日	高木武
新修国文 女学校用	全十冊	昭和12年12月13日	訂正	昭和12年12月21日	富山房編集部
新修国文 女学校用 四年制用	全八冊	昭和12年12月13日	訂正	昭和12年12月21日	富山房編集部
日本女子読本 改訂第一版	全十冊	昭和12年12月8日	訂正再版	昭和12年12月27日	高木武
日本女子読本 四年制用改訂第一版	全八冊	昭和12年12月8日	訂正再版	昭和12年12月27日	高木武
女子新国文 改訂 新版	全十冊	昭和12年12月24日	訂正六版	昭和13年1月17日	芳賀矢一 編 橋本進吉補
女子新国文 改訂 新版 四年制用	全八冊	昭和12年12月24日	訂正六版	昭和13年1月17日	芳賀矢一 編 橋本進吉補
新修国文 四年制 女学校用	全八冊	昭和15年1月27日	訂正再版	昭和15年2月2日	富山房編集部
女子新国文 改訂新版	全十冊	昭和16年11月6日	訂正七版	昭和16年12月6日	芳賀矢一 編 橋本進吉補

表を見ると、先程の金港堂とは少し異なる出版状況が見えてくる。即ち富山房の場合、芳賀矢一を中心とした編者による教科書が大正初期から出版されていたのに対し、高木武による教科書が昭和初期頃から並行して出版されるようになっている。さらに昭和十年代には富山房編集部による『新修国文』が発行され、三つの教科書が並行して発行され続けていたことが分かる。

このような比較は、それぞれの教科書に関して検定

状況を確認しながら行くと膨大な作業量が発生してしまうが、今回のように一覧表をデータベース化してしまえば、出版社ごとの情報の抽出は容易にできてしまう。さらに同様の手続きで著者ごとの比較や教科書ごとの比較など、様々な角度から出版状況を分析すること可能になった。このような分析が極めて容易になったという点が、本一覧表作成のもう一つの成果であると言える。

V. 目次データベースの構築に向けて

(1) 目次情報の重要性

しかし教科書の出版状況だけがわかっても、国語教育的にはあまり大きな意味はないと言わなければならない。私たちが知りたいのは、それぞれの教科書を使ってどのような教育がなされたのか、その内容についてである。その内容を知るための重要な手掛かりとなるのが、教科書の目次情報である。目次は、それぞれの教科書に掲載された作品が何であるかを示すだけでなく、どの作品がどのような順序で並んでいるのか、更にはどのような学年に配当されているのか等を知ることができる重要な資料である。今回作成した一覧表の教科書一冊ごとに、それぞれの目次情報をデー

タ化し、情報を紐づけることによって、それぞれの教材がどのような時期の教科書に掲載されていたか、その変遷の過程を把握することが可能になる。

ここでは、具体的に教科書の目次をいくつか取り上げ、目次の記述から何を読み取ることができるか、その可能性について論じてみる。例えば、「明治・大正・昭和を通じて最も多く採用された教科書」¹¹とも評され、戦前期を代表する中等学校国語教科書の一つとして挙げられる吉田弥平編『中学国文教科書』(光風館書店)について見てみよう。この教科書が最初に検定を通過した訂正再版と、次に検定を通過した訂正4版の第1巻の目次内容は、それぞれ以下の通りである。

◆『中学国文教科書』訂正再版(M40.1)第1巻

一	我が国の風景(口語文)	大和田建樹
二	春の旅(一)	大和田建樹
三	春の旅(二)	
四	学の海(新体詩)	
五	二百三高地の占領(一)(口語文)	
六	二百三高地の占領(二)(口語文)	
七	花は桜木(諺)	
八	都の風俗	
九	雨の桜川	
一〇	ベンニーとブラサム(一)(口語文)	
一一	ベンニーとブラサム(二)(口語文)	
一二	二十四気	
一三	小世界(言文対照)	
一四	二宮尊徳(一)	
一五	二宮尊徳(二)	
一六	何のその(箴言)	
一七	須磨の浦	新保磐次
一八	なつかしき山(新体詩)	佐々木信綱
一九	フレデリキ大王と新兵(口語文)	
二〇	旅行先より友に贈る(書簡文)	
二一	水泳場より友に答ひ(書簡文)	
二二	田園日記	
二三	クラブ工場を観る(口語文)(一)	巖谷小波
二四	クラブ工場を観る(口語文)(二)	巖谷小波
二五	保険業の発達	
二六	有栖川宮威人親王(一)	
二七	有栖川宮威人親王(二)	

◆『中学国文教科書』訂正4版(M44.1)第1巻

一	聖徳	
二	桜花(口語文)	芳賀矢一
三	千里の春 その一	大和田建樹
四	千里の春 その二	大和田建樹
五	入学後両親に(候文)	
六	学の海(新体詩)	
七	捕鯨記 その一(口語文)	
八	捕鯨記 その二(口語文)	
九	大海原(新体詩)	坪内逍遙
一〇	雨の桜川	徳富蘆花
一一	佐久間艇長	
一二	空中飛行機	
一三	須磨	新保磐次
一四	須磨・明石(今様歌)	
一五	蛍の話(口語文)	渡瀬庄三郎
一六	自然の音楽	坪内逍遙
一七	太白山の激戦(口語文)	
一八	花は桜木(俚諺)	
一九	夏の興	徳富蘆花
二〇	遊泳場より友に(候文)	
二一	フレデリキ大王と新兵(口語文)	
二二	幼時の二宮尊徳 その一	幸田露伴
二三	幼時の二宮尊徳 その二	幸田露伴
二四	田園日記	
二五	門出(口語文)	長谷川四迷
二六	垂泰爾山嶺に名を題す	西村天囚
二七	秋分	徳富蘆花
二八	時かぬ種は生えぬ	
二九	闇中の明珠 その一	
三〇	闇中の明珠 その二	

現時点で本文を確認することができていないので、あくまで目次による判断であるが、同じものと考えられる作品のみ斜体および網掛けにした。これをみると同じ作品の方が少ないぐらいであり、4年間で全く異なる教科書になったということがわかる。著者名についても、訂正再版では、大和田建樹、新保磐次、佐佐

木信綱、巖谷小波の4名しか明記されていないのに対して、訂正4版では、大和田、新保に加えて、芳賀矢一、坪内逍遙、徳富蘆花、渡瀬庄三郎、幸田露伴、長谷川四迷、西村天囚などが加わり、課数も27課から30課に増加している。

この二つの比較からも、いわゆる「版違い」の教科

書は、明らかに全く異なるものであることがわかる。一覧の中には「改訂」を書名の中に加え、逆に版数は改めて「訂正再版」と版を重ねない方針を採っていた教科書もあったが、以下のように「改訂」を書名には掲げず、版を重ねる中で「改訂」を行っていた教科書も存在していた。おそらく本教科書のように、長らく同一の書名で出版され、数多くの版を重ねてきたものについては、同様の状況があったと考えられる。たとえ出版年が近い版であっても、改めて検定を受けさせるといふことは、単なる「訂正」に止まらない「改訂」が行われていたことになる。逆に言えば、その違いを丁寧に分析することによって、各教科書の編集方針をより正確に理解することが可能になる。

◆『三訂女子国語読本』訂正十版 (T2) 第10巻		
一	月雪花 (口語文)	芳賀矢一
二	白雲 (韻文)	
三	庭の訓 (書牘文)	阿仏尼
四	伊藤公を誅づ	井上馨
五	論語七章 (漢文対照)	
六	小松内府 その一	
七	小松内府 其の二	
八	親族	添田寿一
九	朝思暮想の序	幸田露伴
十	西行法師	藤岡作太郎
一一	白峰	西行法師
一二	女子と歌	佐々木信綱
一三	小品二則	
一四	霞関臨幸ノ記 (原漢文)	
一五	義時と泰時	
一六	新島守	
一七	小野の山 (韻文)	
一八	常陸帯の序	藤田東湖
一九	スタウ夫人	徳富蘆花
二〇	音楽	
二一	日野の山奥	鴨長明
二二	世界の四聖 その一	
二三	世界の四聖 その二	
二四	日本の使命	

◆『中学国文教科書』修正八版 (T1) 第10巻		
一	月雪花 (口語文)	芳賀矢一
二	国民精神	高山樗牛
三	栄ゆる時 (短歌)	
四	東路の旅	
五	百虫譜	横井也有
六	俚諺論 その一	大西祝
七	俚諺論 その二	大西祝
八	新島守	
九	読書日記 正岡子規	
一〇	なごの海 (短歌)	
一一	小松内府 その一	
一二	小松内府 その二	
一三	朗詠五則	
一四	王子猷	
一五	羽衣	
一六	世界の四聖 その一	高山樗牛
一七	世界の四聖 その二	高山樗牛
一八	心の友	
一九	寂光院 その一	
二〇	寂光院 その二	
二一	出盧 (新体詩)	土井晩翠
二二	大丈夫の覚悟	幸田露伴

上記の二つの教科書は、双方に同一の編者が含まれており、かつ同時代に発行された教科書ということで比較対象としては、最適なものである。双方に共通する中等学校一般の最終年度に求められた文章の程度や、中学校と高等女学校に求められた国語科の内容の差異などを知るうえで重要な資料となり得るものである。しかし多くの作品において著者名が記されておらず、出典についても題目から推測することしかできない。従って実際に目次データを抽出する際には、実際に本文にあたるなど多くの確認作業が必要となる

(2) 目次データベース構築への課題

但し実際に目次データを一覧表に紐づける作業は、決して容易なことではない。量的な問題もさることながら、目次から有益な情報を引き出すためには、紐づける過程で様々な作業を行う必要があると考えられるからである。例えば、下の左側の目次は吉田弥平等が編集した『三訂女子国語読本』(訂正10版、1913(大正2)年1月20日発行、金港堂書籍株式会社)の第10巻のものである。一方、右側にあるのは、ほぼ同時期に発行された吉田弥平編『中学国文教科書』(修正八版、1912(大正元)年12月23日発行、光風館)の第10巻の目次である。

ことが予想される。

もし全ての教科書と目次データを紐づけることができれば、戦前中等学校国語教科書の作品採録状況の全体像が見えてくるはずであり、これまでの研究が大きく塗り替えられることが予想される。先にも述べたように対象となる教科書は約5,000冊に上り、先にも触れたように、どこに所蔵されているのか確認できないものも少なくない。正確な情報を残すためには、それぞれ直接教科書の現物にあたる必要があり、版数や検定の有無についても確認しなければならない。そ

れに加えて、ここで示したように、目次については、作品名や出典、場合によっては執筆者すら明示されていない場合があり、本文にあたるなどして不明な情報を明らかにする作業も求められる。今後は、上記のような課題も踏まえた上で、目次データベース構築に向けた具体的方策について検討を進めたい。

VI. おわりに

(1) 教科書の所在調査の重要性

最後に本研究の課題と意義および今後の可能性についてまとめておく。今回作成を行った一覧表は、あくまで『図書表』に基づくものであり、一覧表に掲載されている教科書について実際に現物を確認した訳ではない。むしろこれまでの調査の感触から言えば、ここに挙げている教科書のうち、所蔵が確認できるものの方が少ないのではないかというのが実際のところである。少なくとも現在最も多く中学校教科書を所蔵しているとされる国立教育政策研究所附属教育図書館と東書文庫だけでは、到底カバーすることはできず、広島大学や筑波大学など教育学部をもつ国立大学の図書館などが重要な調査対象となる。前身である師範学校で使用されたであろう国語科教科書の所蔵を確認し、正確な版に基づいて目次を確認していく必要がある。これは到底個人では抱えきれない作業量であり、多くの方々の協力を得られるような研究体制の構築が求められる。

なお鳥取県の場合、鳥取大学附属図書館以上に鳥取県立図書館において、多くの中学校国語科教科書の所蔵が確認されている。全ての公立図書館に当てはまるとは限らないが、出来るだけ多くの教科書の現物を確認するためには、公立図書館にも調査の範囲を広げる必要があるかもしれない。

(2) データベース化の意義

II (2) において、田坂(1984)について批判的な検討を行ったが、実のところ田坂の研究の意図は、戦前期の中学校教科書における作品の採録状況を包括的に分析し、その変遷を明らかにすることにあったと考えられる。資料的な限界や作品中心のデータ化になってしまったのは、当時の研究状況や技術的な限界によるものに過ぎない。逆に現在であれば、目次内容

をデータベース化することによって、コンピュータの検索機能を用いて横断的かつ多角的に研究をすることが可能になり、田坂が本来狙っていた研究を実際に推し進めることが可能になると思われる。これは書籍や論文という形では実現できないものであり、収集した情報をデータベース化することがもたらす大きなメリットである。

また教科書の所蔵先などについてのデータが共有されることは、筆者のような地方の研究者にとっても重要な意味をもつ。一般に歴史研究は、実際の資料に対するアクセスのしやすさが研究の質に直接かわるが、特に教科書研究の場合、その傾向は顕著であり、所蔵教科書が多い研究施設に近い研究者以外が研究するには、多くの費用や労力が必要となる。近年はデジタルアーカイブ化が進む一方で実際の教科書を手にとって見ることは年々難しくなっており、複写等にかかる費用も大きい¹¹。具体的な所蔵先がデータとして明らかになっており、それがネット上で公開されていけば、調査における労力や費用負担を抑えることにもつながり、そのような点からも研究の進展を促すものになるはずである。

(3) クラウドデータベースによる研究協力体制づくりへ

問題はデータベースをどのようなプロセスで作成していくかという点にある。本発表で提示した一覧表ぐらいであれば、個人で十分作成可能であるが、各巻の目次を紐づけるには、比較にならないほどの多大な労力が必要となる。またこれまでの議論からも明らかのように、既にあるデータを入力するというような単純作業でなく、それぞれの教科書の出版年や版数を確認し、目次内容を入力していく必要があるため、入力作業それ自体に、戦前期の中学校教科書に関する専門的な知識が必要とされる。つまり単に時間と労力をかければ完成するものではなく、関連する研究者の協力を仰ぎながらデータベースを作成するための仕組みづくりが必要となる。

具体的には、先に作成した教科書リストを更に巻ごとに細分化し、それをクラウドデータベースとしてウェブ上にアップした上で、関連する研究者が直接アクセスして、目次内容を書き込めるような仕組みを構築

する必要があると考えている。このような仕組みがあれば、個々の研究者が特定の教科書について研究した際にも、その過程で作成されたデータを集約させ、今後の研究に生かすことが可能になる。アクセス権と編集権をどのように線引きするのかについては、今後議論が必要になるが、まずは上記のような仕組みを構築し、多くの研究者に資料の提供や協力を仰ぐことが現実的な方法であると考えている。とはいえ、上記のようなウェブプラットフォームを構築することについては、筆者自身、十分な知識を有しているとは言えず、その点でも他領域の研究者の協力が必要であることは言うまでもない。

なお今回の一覧表は「国語科」および「国語漢文科」の教科書を対象としており、「漢文科」の教科書については、検討対象には含めていない。しかし、戦前期における中等学校での言葉の学習を検討し、現在の古典教育を構想する上でも、漢文は絶対に無視することができないものであると考えている。「漢文科」についても対象とできるよう、さらに研究の枠組みを拡大するための協力体制の構築を図ることも、今後の大きな課題と考えている。

謝辞

本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C））の助成を受けて行っている研究「戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究」（課題番号：17K04786）の研究成果の一部である。また、本研究を行うにあたって、東京書籍株式会社附設教科書図書館・東書文庫、国立教育政策研究所附属教育図書館、鳥取県立図書館、兵庫教育大学附属図書館において、資料の閲覧に関してご協力・ご配慮頂を頂きました。関係者に改めて感謝の意を表します。

注

- 1 増淵（1981）、12頁。
- 2 2018年3月、筆者自身が東書文庫および教育図書館において行った調査に基づく。
- 3 中村（1986）、25-26頁。
- 4 田坂（1984）、5頁。

- 5 中村（1986）、30-31頁。
- 6 無論、このことは「検定申請本」が研究的価値をもたないということの意味するのではない。「検定申請本」は「検定許可本」や「供給本」との比較において、検定がどのように行われたかということを具体的に検証するための重要な資料であり、「検定申請本」と「検定許可本」や「供給本」は別個の価値をもつものとして論じられるべきである。しかし現状は、それらが混在することによって、実際に授業で用いられた教科書がどれであるのかということのを正しく把握すること自体が困難な状況にある。
- 7 この点については、本論文でも触れた過去の研究発表（「戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究」（第135回全国大学国語教育学会、2018年10月28日））において、筆者自身が既に論じている。
- 8 同種の試みについては、「技術科」領域において、すでに先行事例がある（坂口謙一「戦前わが国語学 校における「実業教科」の検定教科書一覧—1940年代初頭までの手工科、工業科、実業科（商業）教科書—」、『名古屋大学教育学部 技術教育学研究』8、1993年）。また、英語科においても、「明治以降外国語教科書データベース」（外国語教科書データベース作成委員会（委員長：江利川春雄））が「文部省著作および検定済外国語教科書 1887（明治20）年～1947（昭和22）年分」を対象としてweb上に公開されている。
- 9 注2に同じ。
- 10 信州大学の八木雄一郎氏が作成した「中学校国語教科書一覧表」に基づく。経緯については、本論文I（3）を参照。
- 11 井上（1981）、390頁。
- 12 例えば現在、国立教育政策研究所附属教育図書館では、中学校および高等学校の国語教科書をPDF形式で閲覧することができるが、図書館内にある端末からに限られている。またその結果、現物の閲覧は、PDFによる閲覧を行った上で、確認ができない場合に限られている。一方、東書文庫の場合、現物での閲覧のみが可能であるが、閲覧は予約制となっており、閲覧できるのは原則として最大で1日4名と定められている。

引用・参考文献

- 井上敏夫編 (1981)『国語教育史資料』第2巻(教科書史)、東京法令。
- 増淵恒吉編 (1981)『国語教育史資料』第5巻(教育課程史)、東京法令。
- 田坂文穂編 (1984)『旧制中等教育国語科教科書内容索引』教科書研究センター。
- 教科書研究センター編 (1984)『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい。
- 文部省編 (1985-1986)『検定済教科用図書表』第1巻～第7巻(教科書研究資料文献, 第3集 第9集)。
- 中村紀久二 (1986)『検定済教科用図書表 解題』芳文館。
- 坂口謙一 (1993)「戦前我が国諸学校における「実業教科」の検定教科書一覧—1940年代初頭までの手工科、工業科、実業科(商業)教科書—」、名古屋大学教育学部編『技術教育学研究』第8号、149-181頁。
- 浮田真弓 (1998)「明治中後期中学校国語読本教科書に関する一考察」、人文科学教育学会編『人文科教育研究』第25号、17-26頁。
- 橋本暢夫 (2002)『中等学校国語科教材史研究』溪水社。
- 眞有澄香 (2003)「大正期の読本と雑誌—女子教育における文学受容—」、全国大学国語教育学会編『国語科教育』第54集、67-74頁。
- 眞有澄香 (2005)『「読本」の研究—近代日本の女子教育—』おうふう。
- 八木雄一郎 (2008)「中学校教授要目改正(1931(昭和6)年)における教科内容決定の背景—「現代文」の定着に伴う「古典」概念の形成—」、全国大学国語教育学会編『国語科教育』第65集、43-50頁。
- 都築則幸 (2013)「国語教科書が捨ててきたもの—伝統的な言語文化をどう教えてきたのか—」、早稲田大学国語教育学会編『早稲田大学国語教育研究』第33集、33-40頁。
- 中嶋真弓 (2016)「吉田弥平編集「読本」における教材価値の考察—古典教材を視座に—」、『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究編』第41号、101-116頁。
- 外国語教科書データベース作成委員会(委員長:江利川春雄)「明治以降外国語教科書データベース」
<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/index.html>

242	高等女学校	美業学校	女子皇国新読本	全三冊	昭和14年1月17日	訂正	昭和14年1月23日	山岸徳平 岩田九郎	株式会社帝国書院		
243	高等女学校	美業学校	改訂新女子国文 四年制	全二冊	昭和14年1月17日	訂正	昭和14年1月23日	山岸徳平 岩田九郎	株式会社帝国書院		
244	高等女学校	美業学校	改訂新女子国文 四年制	全八冊	昭和15年1月18日	訂正四版	昭和15年1月26日	久松清一	佐藤正夏		
245	高等女学校	美業学校	新修国文 四年制 女学校用	全十冊	昭和15年1月18日	訂正再版	昭和15年1月26日	久松清一	佐藤正夏		
246	高等女学校	美業学校	新修国文 四年制 女学校用	全八冊	昭和15年1月27日	訂正再版	昭和15年2月2日	富山藤編輯部	合資会社富山房		
247	高等女学校	美業学校	皇国女子国語読本	全十冊	昭和15年1月30日	修正再版	昭和15年2月9日	金子彦次郎	上原才一郎		
248	高等女学校	美業学校	皇国女子国語読本	全十冊	昭和15年11月11日	訂正再版	昭和15年11月13日	新村出	合資会社東京修文館 株式会社修文館		
249	高等女学校	美業学校	改訂女子国文 四年制	全八冊	昭和16年8月3日	訂正三版	昭和16年7月30日	薄田久孝 木枝増一	佐藤正夏		
250	高等女学校	美業学校	改訂女子国文 四年制	全八冊	昭和16年8月10日	訂正三版	昭和16年8月15日	久松清一	佐藤正夏		
251	高等女学校	美業学校	皇代女子国語読本 三年制	全十冊	昭和16年8月23日	訂正三版	昭和16年9月4日	堀内松三	株式会社文学社		
252	高等女学校	美業学校	皇代女子国語読本 三年制	全十冊	昭和16年8月28日	訂正三版	昭和16年9月11日	五十嵐力	株式会社帝国書院		
253	高等女学校	美業学校	新制女子国語読本 四年制	全三冊	昭和16年9月27日	修正三版	昭和16年10月11日	山岸徳平 岩田九郎	株式会社帝国書院		
254	高等女学校	美業学校	新制女子国語読本 四年制	全十冊	昭和16年10月13日	修正三版	昭和16年10月24日	吉澤藤則	株式会社三省堂		
255	高等女学校	美業学校	新制女子国語読本 四年制	全八冊	昭和16年11月6日	修正三版	昭和16年11月12日	安藤正次 眞條操	株式会社三省堂		
256	高等女学校	美業学校	改訂女子国文 四年制	全十冊	昭和16年11月6日	修正三版	昭和16年12月8日	金子彦次郎	合資会社富山房		
257	高等女学校	美業学校	改訂女子国文 四年制	全八冊	昭和16年10月30日	訂正三版	昭和16年12月9日	佐佐木隆綱 武田祐吉	上原才一郎		
258	高等女学校	美業学校	新制新撰女子国語読本 四年制	全八冊	昭和16年12月30日	訂正三版	昭和16年12月30日	藤村作	藤川松次郎		
259	高等女学校	美業学校	女子日本語本 新訂版	全十冊	昭和18年6月28日		昭和18年7月7日	藤村作	大日本出版株式会社		修正 第五~第八
260	高等女学校	美業学校	女子日本語本 新訂版	六冊	昭和18年6月28日		昭和18年7月1日	堀内松三	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
261	高等女学校	美業学校	女子国文新編 四年制	六冊	昭和18年6月20日	訂正四版	昭和18年7月15日	吉澤藤則	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
262	高等女学校	美業学校	皇代女子国語読本	六冊	昭和18年6月30日	訂正四版	昭和18年7月15日	薄田久孝 木枝増一	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
263	高等女学校	美業学校	女子新国語読本 新制版	六冊	昭和18年7月5日	訂正四版	昭和18年7月15日	薄田久孝 木枝増一	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
264	高等女学校	美業学校	改訂新女子国文 四年制	四冊	昭和18年7月5日	訂正四版	昭和18年7月30日	五十嵐力	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
265	高等女学校	美業学校	純正女子国語読本 改訂版	六冊	昭和18年7月10日	訂正八版	昭和18年7月30日	芳賀六 橋本進吉輔	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
266	高等女学校	美業学校	女子新国文 改正新編	四冊	昭和18年7月18日	訂正四版	昭和18年7月30日	芳賀六 橋本進吉輔	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
267	高等女学校	美業学校	新制新撰女子国語読本	四冊	昭和18年7月14日	訂正四版	昭和18年7月30日	佐々木隆綱 武田祐吉	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
268	高等女学校	美業学校	皇国新読本	三冊	昭和18年7月10日	訂正四版	昭和18年8月17日	山岸徳平 岩田九郎	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
269	高等女学校	美業学校	改訂女子国文 四年制	四冊	昭和18年7月30日	訂正四版	昭和18年8月17日	金子彦次郎	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八
270	高等女学校	美業学校	新制女子国語読本 四年制	四冊	昭和18年8月2日	修正四版	昭和18年8月17日	安藤正次 眞條操	中華学校教科書株式会社		修正 第五~第八